森鷗外「寧都訪古録」札記

――柳沢淇園と北浦定政、穂井田忠友――

辻　憲男

[要　旨] 森鷗外の大正七年（一九一八）十一月の日記「寧都訪古録」に関する二、三の覚え書き。鷗外は奈良出張中、とくに柳沢淇園と北浦定政の二墓に詣で、簡略な記録を遺した。上古の故地遺跡よりも、これら近世の文人学者の境涯に心ひかれるものがあったのである。加えて正倉院有縁の穂井田忠友の逸話を参考にして、一私人としての鷗外の趣味が奈辺にあったかを探る手がかりとした。それを一語を以て言わば「家族愛」ということになろう。

[キーワード] 森鷗外、「寧都訪古録」、柳沢淇園、北浦定政、穂井田忠友、「奈良五十首」

鷗外の奈良

森鷗外の「寧都訪古録」とは、晩年の日記『委蛇録』の中の大正七年（一九一八）十一月三日条の前に記された小題である（『鷗外全集』第三十五巻「日記」）。この日の朝、鷗外は東京を発ち、京都を経て夜遅く奈良に着いた。帝室博物館総長として正倉院宝物の曝涼に臨むための、初めての四週間の出張であった。同五日に勅封を解き、以

後検閲・調査等に立ち会い、参観者に応接した。晴の日は一日詰めねばならないが、雨が降れば閉扉して退勤した。しかし宿舎で休むのでなく、大和の古寺や史跡を精力的に見て回った。この出張前後の日録は毎日一～二行程度であるのに、開封と訪古の記録だけは長く詳しい。『委蛇録』は大正十一年七月の死の直前まで書き続けた。鷗外はその間毎年、計五度奈良に出張したが、この七年が最も意欲的であった。十一年一月に『明星』に発表した「奈良五十首」は、大半はこの初度の出張の強い印象に由ったものと思われる。[1] それは各年の出張期間中の発信書簡の数を見ても、（〔　〕内は『鷗外全集』第三十六巻に収める書簡の番号）

大正七年	十一月三日～三十日	61通	〔一一九二～一二五二〕
八年	十月三十一日～十一月二十一日	44通	〔一二九八～一三四一〕
九年	十月三十一日～十一月二十一日	52通	〔一三九六～一四四七〕
十年	十月三十一日～十一月二十一日	22通	〔一四七四～一四九五〕
十一年	四月三十日～五月七日	11通	〔一五一〇～一五二〇〕

のごとく、七年の旺盛なることが知られる。幼少の子供らに宛てたものが多いが、鷗外自身も物めずらしく好古の意欲が充溢していた。もっともこの時の無理がこたえたのか、帰京後十二月の半ばを病臥欠勤した。そして翌年、翌々年と、年々出張を負担に感じるようになった。八年の秋は長女・茉莉の婚儀の準備があった。晴天が多く、日録も簡略である。九年も好天続きで、雨はわずか一日、勤務は義務的であった。茉莉の出産の事もあった。十年は病のため帰心甚だしく、十一年五月の臨時開倉に至っては最も疲労を覚えた。

七年十一月の探訪地は、

四日。月曜日。晴。午後、法隆寺（公務）。

五日。火曜日。陰。雨霽後帰途、東大寺。春日神社。

七日。木曜日。朝陰後晴。退出後、新薬師寺。円璽。
八日。金曜日。陰晴相半。退院後、般若寺。北山十八間戸。
九日。土曜日。陰。午時雨、西大寺。平城大極殿址。法華寺。
十日。日曜日。半晴。午時雨、十輪院。
十三日。水曜日。晴。退院後、若草山。（十五日、十六日にも）
十四日。木曜日。雨。薄午、菅原喜光寺。垂仁天皇陵。唐招提寺。薬師寺。柳沢淇園墓。
十八日。月曜日。乍雨乍歇。午後、飛鳥。神武天皇陵。
二十日。水曜日。晴。退出後、高円山。白毫寺。
二十二日。金曜日。雨。午後、北浦定政墓。
二十五日。月曜日。晴。京都博物館（視察）。午餐後、古義堂址。
二十七日。水曜日。晴。退出後、柿本神社。

である。ほとんどが地名と行程を記したのみの、半日未満の出遊である。二十五日は妻に買う帯の品定めもした。二十八日は「放衙」にして一日京に遊んだ。興味深いのは上古の史跡よりも、十四日と二十二日のごとき、近世文化人の墓碑掃苔の記事が詳しいことである。翌八年は忙中、般若寺、大安寺、長谷寺を訪ねた。その他の年も京都博物館公務のほかは、二、三出遊したにとどまる。

鷗外の訪古は、ただ故地旧跡を歩いて歴史的の佇まいを知ることであった。二十三日付の山田珠樹宛の書簡〔一二四二〕に、「今年ハ飛鳥奈良両都ノ地勢ヲ観ル事トイタシ候」とある。見学や調査ではない。まして古美術や建築の鑑賞ではない。その心を言わば、「奈良五十首」の、「いにしへの飛鳥（あすか）の寺を富人（とむひと）の買はむ日までと薄（すすき）領せり」（第33首）のような侘しさである。日記の簡古な漢文が感情を抑制する。そのゆかしい一例は九日の文章である

――午後電車で西大寺まで行った。堂宇は旧観を留めていない。雨中歩いて平城宮大極殿址を訪ねる。而して、

　径絶。踏田塍而進。址高於田圃尺許。荒草没踵。県庁立木標。題曰大極殿址。低回顧望。摘野花数茎而還。途過法華寺。有童女二三人。避雨於廡下。予停歩少時。聞窓櫺内女僧誦経。日暮抵寓。

とある。青丹よし寧都は土壇と荒草を見るのみ、あたりを低回し、野の花を摘んで心慰みにする。帰途、尼門跡前にしめやかな勤行の声と雨音を聞く。雨宿りの童女らを見て、我が子の顔を思ったのであろう。この年、鷗外は五十六歳、茉莉十五歳（明治三十六年〔一九〇三〕生まれ）、次女杏奴九歳、末子類七歳である。出立の朝、駅まで見送りに来た杏奴と類に雑誌とオモチャを買い与えた。老成の父親の幼な子への情愛がうかがわれる。そうして遠く離れて来た古京はしみじみと物寂しい。同じく「奈良五十首」の中に、

　晴るる日はみ倉守るわれ傘さして巡りてぞ見る雨の寺寺
　黄金の像は眩し古寺は外に立ちてこそ見るべかりけれ

の作がある（第21、23首）。優しいロマンティシズムと、孤独な反俗は鷗外の趣味である。後者は法華寺の例のように、ひとり門前に佇むのを良しとした。「黄金の像」は特定の仏像をさすものではあるまい。ちなみに和辻哲郎の『古寺巡礼』はあたかも大正八年五月の出版である。大和の仏像と建築が青年の心を捉えた。鷗外と対照するに、法華寺の十一面観音像に関する感想を見るがよい。あるのは若い生命観と感傷である。鷗外の好尚ではない。

なお後に見るように、平城京跡の研究は江戸末期の北浦定政に始まる。明治末葉には平城京をめぐる関野貞と喜田貞吉の論争があった。喜田はこのあと鷗外を訪ね親しく面談した（十一月十六日。同九年、十年にも来訪）。さても大正二年、奈良大極殿址保存会が設立され、同八年に会が宮跡の土地を取得し、同十一年に保存工事が完了した。まさに鷗外来寧と同じ時期に、宮跡整備の機運が高まったのである。[2]

柳沢淇園

十一月十四日は、薄午に寓を出て、西ノ京から唐招提寺へ向かった。薬師寺で大雨になり、仏足石と歌碑を観て、雨中、矢田村の発志院まで歩いた。[3] 淇園柳里恭の墓に詣でて日が暮れた。十八日付の森潤三郎宛の書簡〔一二二九〕の中に、

朝ヨリ出ヅル「ヲ得シハ只一日ニテ其日ニ旧都南部ヲ見テ大ニ片ガ付候菅原、喜光寺、垂仁陵、唐招提寺、薬師寺等其日ニ看候其日ニ柳里恭ノ墓ニモユキシニ郡山停車場トハ反対ノ方向ナルユヱ大ニ時間ヲ費シ候

とある。ただし十四日付の妻宛の書簡〔一二二二〕の中には、

今日(十四日)朝ヨリ雨ユヱ足駄ヲ買ヒ尻ハシヨリニテパンヲ持チ出カケ候奈良ノ昔ノ都ノ右京ト云フトコロヲ縦横ニ五里程歩キ郡山ニ出デソコヨリ汽車ニテ奈良ヘ夜ニ入リ帰着イタシ候ソノ代リ面白キ旧迹ハ大抵見尽シ候

とある。「縦横ニ五里程」とは、西大寺から薬師寺まで一里余、南下し郡山城址より西行し発志院まで二里余、帰路郡山駅まで東行一里余である。同じく子供らに宛てた書簡〔一二二二〕には、菅原と垂仁天皇陵を見たあと、

オベンタウノパンヲタベテトホイトコロマデキタノデキシヤニノツテカヘリマシタ。

と記すのみ、つまり妻子には矢田村まで行ったことは言わない。「奈良五十首」中にも関係の歌はない。しかるに日録には柳沢氏の墓誌を左のように摘記している（適宜改行して引用する）。

入柳沢氏塋域。淇園里恭墓。題曰竹窓院天外良節居士。三面鐫誌銘。僧雷音所撰。誌云。宝暦戊寅八月晦。罹于微恙。越九月五日。俄而卒。行年五十六。同七日葬于慧日山発志禅院境内。

側有淇園妻女墓。妻墓。題曰桂光院自観壽松大姉。天明六年丙午閏十月歿。

女墓。題曰妙光院如蓮浄秀大姉。

下有子昌鷹墓。題曰慈林院蕾忠秀孝居士。墓誌加賀金沢永福寺僧文琦陳所撰。誌云。名昌鷹。字帯刀。一字公鳳。父者郡山侯之臣柳沢権大夫里恭。母者一乗法親王之臣喜多坊駿河橘由清之女。元文丁巳歳七月十日。生居士于和州郡山大職冠。又云。宝暦乙亥五月感病。同六月十九日終焉。享年十有九。葬于同国慧日山発志禅院境内。

里恭の妻は天明六年（一七八六）、里恭より二十八年後に没した。娘の生没年は記さないが、子昌鷲（昌鷹は誤り）は元文二年（一七三七）に生まれ（「大職冠」は城下の地名）、宝暦五年（一七五五）に十九歳で早逝した。里恭はその三年後に没した。

鷗外は里恭の妻子の運命に感じるところがあったらしい。里恭は享保九年（一七二四）、二十一歳の時に甲府から大和郡山に移住した（『ひとりね』序）。その伝によると、翌年、家老豊原氏の妹多世子と結婚したが、一年余にして妻と長男をなくした。二度目の妻橘氏を迎えたのは享保二十年頃という。南都一乗院宮臣北之坊駿河の女八重である。昌鷲の死後は弟・光教が家を嗣いだ。一女は豊原氏に嫁いだ。里恭の子はそのほかに一男三女があった。[4]

鷗外はかって、里恭に関して少なくとも二、三の記事を成した。その一つは明治二十三年（一八九〇）三月、「柵草紙」に載せた「雑説」と題する漢文七篇のうちの、「伏見氏女」「柳淇園言」の二篇である。[5] 前者は有馬の湯で見た怪が実は火中の姑を助け出して火傷を負った女性であったという話、後者は淀川で鯉を素手で捕る法を聞き人を諌めるのも同じだと言った話である。原拠はともに『雲萍雑志』の巻一、巻二所載の和文であるが、鷗外の興味は事に対する里恭独自の反応にあった。漢文に摘要し、あとに「里恭聞驚其奇行。又愧己之胆怯云」、「嗚呼淇園之言。豈飯牛負鼎之意耶」云々の評言を付加している。鷗外二十八歳、この年一月に「舞姫」を発表したばかりであった。

第二は『日本芸術史』と題した膨大な手稿の中である。[6] 諸書からの抜き書きを集成したもので、すべて出典を明

記する。その徳川時代の絵画のところに「柳沢派」の一項がある。淇園、「大和郡山侯松平甲斐守の族なり」「性豪放にして、又其職を曠うせず」「学内外典に通じ……詩、発句を作り……医薬に通ず。技芸十六種あり」「客を好みて数百人を養ふ」「（『ひとりね』の）首に云く。奈良の京春日の里に若艸といふ女郎ありと。尾に曰く。生涯の学文を妓婦の帯一筋に代へんと。其間議論人を驚すものありといふ」等々。ただし墓所についての記事はない。また項の後半は、年二十一で里恭の妾となり画をよくした三好雪（松慶尼）の事績である。引用の「名人忌辰録」に文化元年（一八〇四）没、年八十二とある。伝記資料と言うよりは奇特な逸話が多い。鷗外の意見等は付さない。しかしこれらの抄録を見ると、鷗外の里恭への意外な親近がうかがわれる。森家が蔵書多く客を好んだことは右の「雑説」中にも見えた。

さて里恭の墓の所在は、当時よく知られていたわけではなかったらしい。ただ明治末葉に、淇園会『柳沢淇園小伝』、奈良県編『大和人物志』、武田酔霞「柳里恭の墳墓に就て」などが公刊された。[7] 鷗外はあるいは『大和人物志』を見て所在を知り、かねて探墓の予定を立てたものであろうか。それの実行は、十日に来訪した高谷三郎より仏足石歌碑の拓本を贈られたことに由るものと思われる。

『鷗外全集』第三十八巻の「雑纂」の中に、鷗外が草した墓誌碑文の類が散見する。明治二十八年の「猪狩三等軍医墓誌銘」を初めとし、おもに明治末年ないし大正十年の撰文十余篇である。探墓掃苔と墓誌の転記は鷗外平常の業である。それは殊に、その間の小説「安井夫人」の附録に駒籠養源寺内の墓誌を録し（大正三年）、史伝『澀江抽斎』に墓碑伝記の熱心な探索を書きつけたことに（同五年）よくあらわれている。抽斎は医者、官吏、考証家であり、経子史詩文を読み、家に客を養った。鷗外は抽斎に対するごとく、早く里恭にも興味を持っていたのである。しかも注意すべきは、里恭の場合も妻と子女の墓誌を転記したことである。次の北浦定政の場合も同様である。そこに家族を思う鷗外の心がある。

昭和四十七年（一九七二）、石川淳は奈良に鷗外の足跡をたどり、某日、大和郡山から奈良古市へ車を走らせた。しかし里恭の墓については、

ただちに黄檗宗恵日山発志禅院の墓地におもむいて、淇園里恭の墓を見る。竹窗院天外良節居士。屋根があって、墓石に苔がない。訪古録に三面鐫誌銘としてあるとほりだが、沙門雷音の撰文には誤伝が多いさうだから、仔細に引写すことはない。郡山はここまで。[8]

と、所在を確かめただけで、次下の定政の記述に比べて実に素っ気ない。里恭の条は「寧都訪古録」中最も長文である。鷗外の関心は上掲のごとく、里恭一人よりも家族の墓のほうにあった。右の石川流はそうした心に寄り添っていない。

なお近年の里恭研究に学ぶに、

武士としての公の勤めと、学芸の私の業を、この誠の上にいとなんだのが淇園であるが、享保から宝暦の、停滞し偏頗を生じた徳川封建社会では、淇園自らにおいても、自然二つの間に空隙がある如くに思われ、そうした公私二面を持つ彼は社会から見れば畸人と認められた。ここに彼の文人としての性格がある。／自己の学芸への関心が、武士としての公生活によって十分に満たされない形にあった彼は、学芸の一種の後援者として、学芸の社会に身を置く生活面をも持つようになった。さまざまの文人芸術家と風交を結んだ。[9]

といった見解がある。ひそかに思う、「武士」を「軍医」に置き換えて読むのは、当たらずと雖も遠からずと言うを得んか。

北浦定政

二十二日の午後は、雨中、北浦定政の墓に詣でた。奈良の南郊一里ほどの添上郡古市村にある。[10]而して、

古市村東北隅。其地無寺院。而有塋域。域之東北隅為北浦氏諸墓所在処。
定政墓。面題曰一心院遊山定政居士。背有遺詠三十一言。不足伝。左側彫曰明治四未年正月七日歿。北浦義助
藤原定政墓。年五十五。
右辺有其妻墓。面題曰海心院智光恵観大姉。右側雕曰故北浦定政室満子女。年六十五。左側彫曰明治十五年五
月二十九日歿。

とある（適宜改行した）。夫妻の墓誌をかく転記し、野の花を摘んで供えた。宿舎には日暮れまでに帰った。前出、翌日付の山田珠樹宛の書簡〔一二四二〕に、

昨日ハ雨ニテ古市村ニ出カケ候徳川時代ノ末北浦定政ト云者アリテ奈良古都ノ図ヲ作リ候其人ノ墓ヲタヅネ参候今日マデノ所見ヲ以テスレバ奈良ハ人々争テ研究候ヘドモ飛鳥ハマダ多ク手ヲ下サヌユヱ随分研究ノ余地有之カト奉存候

とあり、二十二日夜の子供ら宛の書簡〔一二四〇〕に、

○ケフハアサカラアメデス。百ネンホドマヘニナラノミヤコノコトヲヨクシツテヰテチヅヲツクツタキタウラトイフヒトガアリマス。ソノヒトノオハカハヰナカニアツテキシヤデハイカレマセン。ソコデケフアルイテオハカニイツテハナヲアゲマシタ。ミチデヰナカノセウガクカウカラカヘルコドモガパパヲミテ「ヒゲガナガイナガイ」トイツテツイテキマシタ。

とある。〔一二五二〕の略図にも「フルイチ／キタウラノハカ」の記入がある（「コドモタチニ」、日付不詳）。妻への書簡〔一二四一〕にはこのことは書かない。

さて定政は文化十四年（一八一七）の生まれ、その妻は一つ年下で、定政の没後十一年を生きた。「北浦家系図」[11]に、「添上郡神殿村石田嘉兵衛三女　マチ女」とある。鷗外の翻字に「満子女」とあるのは「満千女」の誤りとい

う。[12] 子はなく、津藩臣服部氏の次男定功を迎えて嗣子とした。定政の父政俊は「古市銀札会所手代」を勤め、母モト女は「東大寺三役堀池氏」の出である。

鷗外の定政への関心は、「奈良五十首」の、

なかなかに定政賢しいにしへの奈良の都を紙の上に建つ　（第49首）

にもあらわれている。定政は官吏であり国学者であった。鷗外は夙にそれを知り、その二足の草鞋に敬意を表し、親近を感じた。当時の備忘録「南都小記」にも「寧都古今図　北浦ヲトリテ宗孟寛作ル」の一行がある（『鷗外全集』第二十巻）。墓参は前述、十六日の喜田貞吉との話から思い立ったのでもあろう。あるいはまた前出『大和人物志』の定政の項を披見したかもしれない。鷗外の蔵書中には、明治三十六年古書保存会刊の定政の『平城宮大内裏跡坪割之図』があった。[13]

上古の遺物と言っても、地上には寺院建築があるばかりである。定政は地を掘ることなく、せめても紙の上に古き都を再建した。学の賢明である。これを第49首目に置いたのは、貧富、貪欲の近代都市（第47、48首）へのアイロニーとして、幻の平城京を反措定したのである。而して第50首は、汽車に乗れば、その夢の中のような都から「我」はたちまち現代に引き戻されるというのである。鷗外の著作の分野は、晩年に小説史伝から歴史考証へと移行した。定政や喜田や次の穂井田忠友が見た奈良が、今や鷗外の目の前に在った。

穂井田忠友

鷗外の、淇園と定政に対する興味が右のごとくであったとすれば、付して参考すべきは穂井田忠友の逸話である。忠友は寛政三年（一七九一）生、弘化四年（一八四七）没、桂門の俊才として、また正倉院研究の先駆者として知られる。鷗外は十一月二十七日、正倉院で水木要太郎蔵の忠友所用の印を見、その模写を「寧都訪古録」に遺

した。これについて鷗外の感想は見えないが、野猪の鈕の「弄玩具」とは、何か意味ありげでもある。而して「奈良五十首」に、

少女をば奉行の妾に遣りぬとか客よ黙あれあはれ忠友　（第14首）

の一首が入った。この時の伝聞に由来する作であろうか。「客」は誰かわからない。「あはれ」は軽蔑ではなく、しみじみとした哀憐であろう。

近代の文献の最初は明治三十三年、井上通泰の、

或人の説に娘一人ありしが奈良奉行梶野某の妾となりきと云ふ。梶野某とは忠友の消息に見えたる梶野土佐守なるべし。

である。この論考は後に『国学者伝記集成』に採録された。次いで弥富浜雄編の忠友「小伝」に、一説に姉とも云い、又娘とも云うとある。[14]「或人の説」や「一説」の根拠は明らかでない。

それから降って大正十四年（一九二五）、森銑三は、

忠友の奈良朝研究の裏面には、悲しい犠牲が払われていた。彼は尊い御物を自由に見るの便宜を得んがために、一人きりの女を梶野の側室にしたのだった。〔「少女をば」の歌を引用〕私等は忠友の最愛の女を敢えて日蔭者とした、その熾烈な研究心に無言の敬意を表したい。冷たい道徳的な批判など下すに忍びないものがある。

と書いた。[15]「無言の敬意」とは「客よ黙あれ」に相応するのであろう。鷗外にはそれは確かに哀れな行為と映ったようである。しかし逆に、銑三の理解は非情のヒロイズムが過ぎるように思われる。私見によれば、事の真相はそれらの中間あたりにあったのではあるまいか。

梶野某は梶野良材、安永二年（一七七三）生、嘉永六年（一八五三）没。天保二年（一八三一）奈良奉行となり

（五十八歳）、同七年京都町奉行に転じた。その後江戸に帰り水野忠邦に重用され、同十一年勘定奉行となり、天保の改革を推進した一人である。忠友より十八歳年上で、忠友の娘とは孫娘ほどの年の開きがあるであろう。果たして研究の便宜のために、忠友が掌中の珠を贈ったというのは出来すぎた話のようにも思われる。梶野は好古の趣味があり、『山城大和見聞随筆』のほか『笠置紀行』天保二年、『三州矢立筆記』天保十年等の著述を遺した。[16] 忠友にとっては尊敬すべき主君である。人はもしや忠友を悪代官に屈した俗物のごとく言わんか、あるいは反権力の悲哀をいう作り話と見るべきであろうか。いずれにしても、女子の父たる鷗外には忍び難い行為と感じられたのであろう。

ちなみに以上三人の享年は、淇園五十六（墓誌）、定政五十五、忠友五十七である。偶然ながら、この年鷗外は数え年五十七歳、己が生と家族につけても何がしか思うところがあったに違いない。

注

（1）「奈良五十首」は形の上で次の十の部分に分かれる。「　」内は初出、各第一首の下に付した注。第1首～第8首、第9～23首「正倉院」、第24～26首「東大寺」、第27～32首「興福寺慈恩会」、第33～35首「元興寺址」、第36首「般若寺」、第37首「新薬師寺」、第38首「大安寺」、第39首「白毫寺」、第40～50首。このうち興福寺慈恩会は日記の大正十年十一月十三日に、大安寺は八年十一月十一日に対応する。『鷗外全集』第十九巻「詩歌」に収める。

（2）奈良国立文化財研究所『平城宮跡保存の先覚者たち―北浦定政を中心として―』展覧会図録、昭和五十一年による。

（3）黄檗宗慧日山発志禅院。宝永六年（一七〇九）、郡山城主本多忠常が逝去した時、嗣子忠直が廟所を築き建立した。柳沢氏入部の後は、主に家老級の菩提寺となった（『奈良県史』寺院）。いま大和郡山市外川町。奈良交通バス矢田寺行き奈良高専前下車。塋域は南斜面中央にある。柳里恭は宝永元年（一七〇四）～宝暦八年（一七五八）。なお後出の備忘録「南都小

記」に、「陵　松下見林　細井知名（兄）、（綱吉―吉保）知慎（弟）郡山」の一行がある（『鷗外全集』第二十巻）。細井知慎は広沢（こうたく）。万治元年（一六五八）～享保二十年（一七三五）。里恭に書を教えた儒者。

（4）植谷元「柳沢淇園の生涯」、国語国文昭和三十年四月。また「大和文化研究」第四巻第五・六合併号柳里恭特輯に、植谷編「年譜」「系図」等を載せる（昭和三十三年六月）。

（5）『鷗外全集』第三十八巻、「雑纂」一二七～一二八頁。初出、「柵草紙」第六号には小林紺珠の署名がある。「柳淇園言」の存在は注4文献の植谷編「参考文献目録」に教えられた。

（6）『鷗外全集』第三十七巻、「日本芸術史資料」四〇〇～四〇二頁。同書後記に、手稿は三十八巻本全集において初めて翻刻されたとある。昭和五十年刊。

（7）『柳沢淇園小伝』は明治四十年（一九〇七）刊、本文二十八頁の小冊。系図、年譜を付す。二〇一二年五月、奈良大学図書館蔵本を閲覧させていただいた。同書に「墓碑（在生駒郡矢田村大字外川発志院）」とあり、墓誌を翻刻する。水木要太郎著という（注4植谷論文）。鷗外は水木から忠友の印を見せられ（後述。「寧都訪古録」二十七日）、漢詩二首を作ったことがある（『鷗外全集』第十九巻「詩歌」後記）。また『大和人物志』は四十二年刊、柳沢里恭の項に「矢田の発志院に葬れり」とある。武田稿は考古学雑誌第一巻第三号、四十三年十一月所載、墓の所在分明ならず云々とある。

（8）石川淳「奈良」、『鷗外全集』月報5～8、昭和四十七年三月～六月。のち石川『前賢余韻』同五十年に収める。

（9）日本古典文学大系『近世随想集』、「ひとりね」の中村幸彦の解説、昭和四十年。のち中村『近世文藝思潮攷』同五十年に収める。また別に参考文献として、楢林忠男『文人への照射　丈山・淇園・竹田』、第二章「遊蕩の中で」、昭和五十年がある。

（10）現在、奈良市古市町。奈良交通バス山村行き春日苑住宅前下車。

（11）奈良国立文化財研究所史料第四十五冊『北浦定政関係資料』一九九七年所収。

（12）平山城児『鷗外「奈良五十首」の意味』昭和五十年。同書は、定政墓碑背面の和歌の「くひ」（悔）は天誅組に関わる事

情があったことを明らかにした。鷗外がこの遺詠を「不足伝」とした理由は明らかでない。

(13) 明治四十一年十月、喜田貞吉は歴史地理第十二巻第四号に「平城京遺址研究者北浦定政」を発表した。同誌同巻の第二〜五号に連載した「「平城京及大内裏考」評論」の別稿である。すでに注12の文献に、喜田との話のことや、『大和人物志』(同四十二年刊)、『平城宮大内裏跡坪割之図』複製本についての指摘がある。その他、鷗外と喜田の親交に関する文献に、富士川英郎「森鷗外と喜田貞吉」がある(『比較文学研究』第十三号、昭和四十二年十一月。のち富士川『鷗外雑志』同五十八年に収める)。地元奈良の出版物、喜多野徳俊『森鷗外と奈良』二〇〇五年も参考になる。

(14) 井上通泰「史伝 穂井田忠友」、考古第一編第三号、明治三十三年三月(一九八四年復刻刊行)。『国学者伝記集成』は明治三十七年刊(一九六七年復刻版による)。また弥富浜雄編『穂井田忠友家集附小伝』は明治四十四年刊。

(15) 森銑三『偉人暦 続編下』中公文庫、一九九七年。初出は新聞「新愛知」大正十四年九月十九日付。銑三は当時三十歳の青年である。

(16) いずれも国立国会図書館蔵。『山城大和見聞随筆』は、別にそれを大正二年に柳田国男が写させた浄書本がある。その影印を成城大学民俗学研究所刊『諸国叢書』第六輯、昭和六十三年に収める。

(二〇一二年三月二十五日)